



No. 111

発行人 樽林 元樹
発行所・事務局 一般社団法人千葉県社会福祉士会
〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港 4 番 5 号
千葉県社会福祉センター 5 階 (新住所)
TEL 043-238-2866
Fax 043-238-2867
<http://www.cswchiba.com/>
E-mail: office@cschwiba.com

※ 点と線はメール配信でも読めます!

特集 「多分野で活躍する ソーシャルワーカー」



ただ一点、『あなたの幸せ』を願う。

人が生まれて、今日まで生活を続けてきた過程で、誰しもが経験するはずです。

そして、幸せを願う手段は言葉だけとは限りません。

ある親は子を愛おしく思い、子は屈託のない笑顔を見せることで精一杯の愛を返しました。

ある者は病を治す熟達した技術、平和を願う祈り、困難を克服する研究で幸せを願いました。

●遺品整理 ●生前整理
●ゴミ屋敷のかたづけ
●不用品処分 ●草刈
●その他お家の事何でも
9時~18時 年中無休
TEL03-6863-9826
お気軽にお電話下さい
おたすけ救急車

介護保険外サービス
福祉に強い便利屋
グランドール

とにかく何でもやります!
☎ 080-8166-3774
<https://benriyagrandeur.com>

《 特集 》

- 2 多分野で活躍するSW
- 8 社会福祉士のわ
- 9 SW実習変更のポイント
- 10 孤独・孤立相談ダイアル
- 11 談話室 社会福祉士会懇親会に参加して
- 12 事務局便り

特集

多分野で活躍する
ソーシャルワーカー

「結婚しても子どもが生まれても、心から“おめでとう”と言える世の中のために」
婚活ソーシャルワーカー
佐藤 祐佳（さとうゆか）



—大阪を拠点として活躍中の佐藤さんは、結婚相談所を開設して一年目。なにに、結婚相談所とソーシャルワーク？好奇心丸出しでお話を伺いました！
今、どんな立場でお仕事をされているんですか？

保育園の事務をしながら個人事業主として結婚相談所をやっています。いわゆる、仲人、結婚を望

む独身男女のマッチングですね。その中で「いい人がいない」「モチベーション」などの悩み相談もありますが、晩婚化の影響で、例えば両親や祖父母の介護とか、障害を持つ兄弟をケアしているヤングケアラーが結婚適齢期となる人の相談もあります。

—男女の出会いの背景にあるさまざまな家族の形、かあ・・・結婚したい人って多いんですか？（懐疑的）

結婚したいきっかけは、「子ども」ですね。「子どもをもって初めて一人前なんだ」と両親や上司が言ってきたり、周りの人に子どもができて自分も欲しいと思ったり・・・日本はまだ「選択的シングル」が認められない風潮があったり、「片親はかわいそうだよね、だったら結婚しようか」というこ

ともありますし、昨今のコロナの影響もあって、一人でいるのは寂しいし結婚を考えるって思う人が増えていきますね。

—ふむふむ。「好き好き大好き♡」だけじゃないんですね（還暦手前で気づく今さら感満載の独身社会福祉士）

仲人は入籍前までの仕事だけでなく、そこから先の問題もある。結婚後の悩みが大きいですよ。兵庫県の保育園で社会福祉士として子育て支援に関わっていますが、そこでも家庭の事情が見えてきますね。

—例えばどんな事？

食事の時に箸が使えなかったり、野菜や果物を食べたことがなかったり。入浴しないとか身づくろいができないとか。その親も、なかなかコミュニケーションがうまくできずに苦労している・・・以前「保育所落ちた、日本死ぬ」とTwitterに投稿されたことが話題になりましたよね。育休明けの人が子どもの急な病気や怪我で申し訳なさそうに仕事場から

早退する状況について、当時独身の同僚が、「結婚はいやだ」と言ったんです。結婚して子どもをもつ未来が見えない・・・そんな状況なんだと痛感しました。

—佐藤さんの社会福祉士としての思いと、今後の野望を教えてください！

男女のマッチングだけじゃない、総合的な「家族」の相談場所があればいいのでは？そんな想いから、婚活ソーシャルワーカーとして、孤立せずに家族を支える存在になるべく活動しています。福祉分野とは異なるため、先輩SWからのSVや、様々な分野で活躍しているSWとのネットワークを通じて、福祉的な視点をアツプデートしています。家族を支える支援として根底にある幸せの追求をサポートするソーシャルワークは、すべてのライフステージに必要であると感じています。社会福祉士としてつながる・つなげる支援を意識しています。

—佐藤さん、ありがとうございます。早く千葉に帰っておいで。

歯科医師

横引 良評 (よこびきりょうへい)



「歯科医師でありながら、社会福祉士の資格を取得し、活躍の場を広げている横引良評さんにお話を聞きました。」

現在の仕事と社会福祉士資格を取得した経緯を教えてください。

現在は、歯科医として働き始めて間もなく九年。働き始めた当初は、歯科医としての自分の技術の向上のことしか考えていませんでした。でも、訪問歯科で施設を訪ねたり、医院に併設されている住宅介護支援事業所の職員と話をするうちに、福祉の知識があることで、歯科医としての仕事の内容が豊かになると感じ、勉強を始めました。

「始めから資格を取るつもりだったのですか？」

訪問歯科で救護施設に行くことがありました。治療をしながら患者さんと向き合っている内に、この方が今までどんな人生を歩んでこられたのか、と。そこに思いを馳せた時に、もっと勉強して資格を取りたい、と思うようになりました。ケアマネの資格も取得しました。

「患者さんの生活歴や、置かれている状況を知るためには、資格を取る必要があると？」

医師や歯科医師で社会福祉士を持つている人は少ないです。ただ、医療を行う上で福祉の知識があることは、歯科医としての業務自体を変えていくものだと感じました。医療や歯科治療は、本来誰でも受けられるものであり、受けられるべきものです。誰にでも門戸は開かれているものだ、ということをお伝えしていきたいです。

「歯科医、社会福祉士、両方の視点から、今の社会の問題点は？」

歯科治療は、来てもらって処置をするということが前提。高齢化が進むと医院まで来ること自体が難しくなっています。そこでアウトリーチの考え方が必要となり、訪問診療ももっと広がっていくべきですが、手続きやコストの面で課題を感じてしまう歯科医師も多いです。口の中の医療はとも大それたのに、どうしても後回しになってしまっています。

社会福祉士やケアマネからのニーズも多く、もっと広がっていくように工夫が必要です。そのためにも行政とのつながりを持てていきたいです。

逆に、社会福祉士から歯科医に求めることはありますか？

「歯科医から「今の歯の状態では今後の健康に影響が出るよ」と言われればより伝わるのでは。社会福祉士とタッグを組んで伝えていくことが出来たら良い影響があるはず。」

歯科医としてもそこは重要な

に、伝え方によっては逆効果になることもあります。社会福祉士の視点で支援者と連携を取りながらアプローチしていくことは強みにもなります。

「歯科医であり社会福祉士である横引さんの今後の展望は？」

令和五年四月に、歯科医としての一つの目標であった自分のクリニックを立ち上げます。そこで軌道に乗ったら養成機関と連携して、社会福祉士の実習にも関わってきたいです。

自分が出ることとしては、社会福祉士を目指す学生に医療のことを、医療を目指す学生に福祉のことを伝えていくことかな、と思っています。

また、歯科医師会、社会福祉士のどちらの会員でもある、という立場から二つの会を繋いでいく役割が出来たらと考えています。

「歯科医師と社会福祉士の懸け橋になる活躍を期待しています。今日はありがとうございました。」

柏市民協働支援員
松清 智洋 (まつきよともひろ)



—設計事務所、介護施設、市民サ
ポートセンター、災害支援と幅広
い経験をお持ちの松清智洋さん
にお話を伺いました。

建築、介護の仕事について聞か
せてください。

元々設計事務所より都市計画の
まちづくりをやっていたんです
ね。そこに住みたい人を集めて話
をしながら、コーディネートと
して、ひとつの空間を一緒に創る
プロセスをやっていく。そのよう
な中で周辺地域との関わりも出て
くる。それが面白いと感じまし
た。介護保険制度が出来たころに
福祉の仕事に興味を示し、介護の
仕事をするようになりました。そ
の中で、施設の中のケアでの限界
を感じるようになりました。そこ

に入る前の社会にアプローチでき
ないかと思い、ソーシャルワーカ
ーとして資格をとるようになりま
した。その後、市民活動を支援す
る立場に興味を示し、市民活動セ
ンターで働くことになりました。

—現在の活動でソーシャルワー
クはどのように活かされますか？

市民活動自体が地域に関わり地
域を変えていく、課題解決型の動
きができるようサポートするよう
心掛けてきました。やっている人
は趣味目的な方でも、その活動が
地域の中に課題解決できる価値が
つけられるかが重要で、ソシヤ
ルワークの発想がそこに活かされ
ると思います。

—災害支援の活動について聞かせ
てください。

災害支援は阪神淡路大震災を契
機に関わっています。災害支援ネ
ットワークちば(CVOAD)
は、市町村単位だけでなく、県域
での支援の動きが必要と感じる中
で関わるようになりました。た
だ、僕の役割は市町村の地域の単
位でもっと自覚的に動いていける
ようなネットワークづくりをやり
たいと思っています。子どもの世
話、障害のある人のサポートな

ど、町会を超えて面倒みられるし
くみをつくるとか、その為に普段
からの顔の見える関係づくりがで
きればと思います。自分達が何を
すべきかというところが見えれば
市民は動くことができる。そうい
うところにもっていきたいです
ね。

—今の社会で課題と感じている「
とは？

子どもがちゃんと育つ環境とい
うのがどんどんなくなってきたい
ます。そこをキープしていくのは
大人の責任としてやらなければな
らない。自分ができるところを考え
たときに、子どもの選択肢をキ
ープしていくためにできることは何
かな？というのが、考えの中心に
はあります。「居場所づくり」と
いう言葉が多く使われるようにな
ってきていますが、本当の意味で
の子どもの居場所って今なくなっ
てきているほうがはるかに多いで
すよね。子どもの居場所はひとつ
ではない。多様性をどのように担
保していくのか。というのが課題
だと感じています。たとえば、一
軒家が借りられれば、子どもたち
が自分たちの興味をもっている場
をつくれるとか、子どもが今の環境

から逃げ出したという考えがあ
れば、そのような場づくりをする
とか。僕なりにできることをやっ
ていきたいと思っています。

—最後に、職能団体としての社会
福祉士会にどのような役割を期待
しますか？

職能団体として確固たる地位を
確保するのが難しい。逆にそこが
強みだとも思います。現実的には
地域の組織と関わりながら、ソ
シャルワークで繋ぎ、その持ち味
を生かすのが今の社会福祉士に求
められていることで、社会福祉士
会も「これが社会福祉士です
よ。」というより、なんでもや
る。そこから、多様なシーンで社
会福祉士のスキルを活かせるとい
うことを出していけたり、更には
可能性を広げていけるといいので
は。

「社会福祉士が入っていくと地域
がうまくまわっていくよね。」と
いうところができるといいのでは
と思います。



理学療法士
高木 憲司（たかきけんじ）



—今に至るまでの経歴をお聞かせ下さい。

大分県で鍼灸あんまマッサージ治療院を営む父の影響もあり理学療法士になりました。十八年間、国立別府重度障害者センターでの勤務を通し、自分なりに慢性頸髄損傷者のリハビリの方法論が一定程度確立できた感覚を覚えた頃、厚生労働省に転勤、福祉用具専門官として勤務することとなりました。そこでリハビリ患者と関わる中で課題であった車椅子のオプションを自費ではなく公費にすることをそのまま政策に反映させていくという経験を見せて頂きました。その後障害福祉専門官や課長補佐として、重度訪問介護の対象拡大、障害程度区分を障害支援区分へ、喀痰吸引等のヘルパーの研究等、九年間国の障害福祉施策の

中心として関わらせて頂きました。現在は和洋女子大学で社会福祉士の養成として障害福祉の授業を担当しています。その他厚生労働省関係事業の各種委員等も担っています。社会福祉士は令和三年に取得しました。

—個の支援に携わる中で把握してきた課題から政策形成につなげるという過程はまさにソーシャルワークシヨンの過程ですね。以前初めてお会いした時、リッチモンドの本から「リッチモンドの怒り」を感じたというお話が心に今も残っています。

リッチモンドは現状に対しての「なんで？」というのが源流となっているのではないかと感じます。例えばソーシャルワークの源流である宗教家や資本家の友愛訪問は、布教や団体の利益や自己満足が根底に少なからずあった。そこにリッチモンドは疑問を感じ、本当の意味での支援とは？ということを探求めたのではないかと。私も「なんで重度な障害者ほど車椅子の自費負担部分が多いの？」とか、同じような感覚を持ってきたことが変える力になった。世の中に対する「変えたい気持ち」やある種の

「怒り」は大きな原動力の一つになるのだと、リッチモンドから感じ、共感しました。

—理学療法士のアプローチと社会福祉士のアプローチの違いはありますか？

リハビリの現場では、重度障害の方の生活をどうすれば豊かにすることができるか、チームで支援していました。そのチームの中でソーシャルワーカーと連携し、理学療法士として見てきました。

現在大学の社会福祉に関する教員として、取得すべきと思いついて、大学で、いざ社会福祉士となってみると、傾聴一つとっても非常に深いなど。クライエントへ、理学療法士としての「リハビリに関する知識の伝達」と、社会福祉士のその人の気持ちを「聴く」という違いを痛感しました。ケースワークであるマイクロに耳を傾け、そこから政策というマクロに繋がります。マイクロがなければマクロはなく、その間にある課題整理や関係省庁等の調整、政策提言というメゾを行えるのは、社会福祉士であり職能団体である社会福祉士会だと思っています。

—現在社会福祉法人の理事としても活躍していますよね。

基幹相談支援センターでケースワークにあたる職員の相談をスーパーバイザーとして受け、そこから地域課題、政策課題が浮かび上がるのが多々あり、その気付きを促す立場であることを意識しています。若い世代を育てていると関わる中で感じましたが、これは私にとって社会福祉士としてのソーシャルワークのメゾの役割だと思っています。

—最後に、社会福祉士になって仕事で役に立っている、活かされていることは？

社会福祉士の臨床は、社会福祉士になってからがスタートなのだと感じています。現在電話相談の支援も行っており、そこでソーシャルワークの根っこを学んでいます。悩んでいる人、言葉にできない人は世代を超えて沢山いて、「聴く」ことの深さ、課題の裏に隠れている想いを「表出」することの難しさ、人と関わることの大切さ、人の気持ちの深さを社会福祉士になってから感じています。自身の人間関係にも生かすことができている。また、大学のユニバーサルサポート推進室で室長として助言も行っていますが、コロナ禍もあいまって、学生の悩みや

病み、家庭環境などは様々。社会福祉士としてソーシャルワークの現場、臨床、研鑽を重ねてこなければスーパーバイザーはできなかつたと思います。社会福祉士になつて良かった。

「私達自身も忘れがちになる「その人の本当の声に耳を傾ける」というソーシャルワークの根源と、その重要性を再認識させて頂きました。ありがとうございます」

曹洞宗大洞院（だいどういん）
櫻井 千穂（さくらいちほ）



私の勤める大洞院は昔から柏市北部地域にあるお寺です。お寺の仕事に携り十五年が経ちました。お寺での仕事は三六五日二四時間です。子どもが生まれてからは、赤ちゃん連れでお寺の仕事をしています。周りの方々の協力

があつてこそ、三人の子育てができた実感をしています。

私自身は山形県出身で、福祉系の大学卒業後、一旦は企業に就職をしました。新卒二年目で現場を任され、福祉とは全く異なる仕事をしています。退職後に再度福祉の勉強を始め、社会福祉士の資格取得をしています。宮城県で高齢者分野や社会福祉協議会の相談窓口業務に携わり、その後、ご縁があり柏で暮らすことになりました。

大洞院は地域に開かれた場所であり、生活の身近な場所にあるお寺なので、地域交流の場所にもなっています。住職は言います。

「お骨になればお墓に入ることになる。皆さん是非生きているうちに、坐る、眺める、聴く、感じる、そして他の方々と交流する場として大洞院にお出でになつて下さい。」私の一番の役目は、こう言う住職のサポートです。

大洞院で開催しているサロンはいくつかあり、知恵袋サロンは高齢者に対し、ニーズに応じた情報提供ができるよう、また花福カフェは認知症状があつても参加できる居場所として、そして子育てカ

フェは楽しく子育てができるよう、親子のつながりを基底に、長く活動を続けています。他にも坐禅会、書道教室、活花教室、写経会、着付け教室などのサークルも活動しています。近年は御朱印を求めてお出でになる方も増えてきました。

先代から続く、広い本堂でのコンサート（通称…寺コン）の定期開催や、ギャラリーにおける月替りの作品展示など、地域に身近な場所としても活用されています。

また大洞院応援隊というボランティアさんたちには、お寺の各行事や雛まつり展の設営や寺コンの準備など、得意分野を生かしながら出来る範囲でのご協力を頂いています。

柏での暮らしが長くなり、お寺での仕事と家庭生活で忙しい毎日、元気だけが取り柄の私でしたが、昨年、病気が見つかり入院しました。その経験から、何気ない日常生活を送れる事がとても有難いことであると強く感じました。これまで様々な相談を受けてきましたが、体が自由に動かせないもどかしさ、病気への不安などが自分事となり、より、その人の辛い

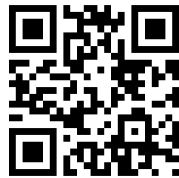
気持ちを実感として受け止める機会にもなりました。

社会福祉士として福祉系の実践現場に携わっていないため、ジレンマが生じることもあります。福祉の専門職として、実践や研究にも興味があります。しかし、今、自分ができることを大切にしながら、多様な考えや生き方を受け止める、人に変化を求めるのではなく、自分が柔軟でいるよう意識をしています。

大洞院は年間を通じて様々な行事があります。頭にある引き出しが少しゆとりのある状態を維持しつつ、次のステップに向けての新しい活動も考えている最中です。

「散歩中の人がお地藏様に手を合わせ、敷地内で子どもたちが遊び、大洞院は地域に開かれたお寺さんでした。当日は一歳の孫を連れてお邪魔しましたが、子どもの楽しめる遊具があり、子育て中のママさんも安心できる場所でした。優しい語り口の櫻井さんには、不安な気持ちを包み込んでしまふような絶対的な安心感があります。」

地域のつながりを強くし、全体の地域福祉力を高めていることが、櫻井さんの担っている専門性であると感じました。



<http://www.daitoin.net/>

弁護士の資格をもつ

ソーシャルワーカー

安井 飛鳥 (やすいあすか)



「弁護士の資格をもちながら、子どもや若者分野でのソーシャルワーカーで活躍されている安井飛鳥さんにお話をお聞きしました。弁護士でありながらソーシャルワーカーとなった経緯は？」

元々自分自身の当事者経験もあり子どもや家族支援に関心がありました。学童保育の仕事が始める中で、様々な事情でしんどい思いをしている子どもや家庭と出会ってきました。そうした子どもや家庭のためにもっとできることはないかと思い、弁護士の道に飛び込みました。しかし、活動の中で、マジョリテイ中心に作られた法律や裁判による解決にはどうしても限界があると感じるようになってきました。その一方で触法障害者の刑事弁護等を通じてソーシャルワーカーと連携する中で、法律にとらわれない権利擁護のアプローチをする姿をみて、自分もそのような支援を行いたいと思い、ソーシャルワーカーになりました。

「実際にソーシャルワーカーとして活動されていかがでしたか？」

視点が増えたことで一件一件の重みや悩みが増えました。直截的な解決を目指して(私自身が)スーパーマンとして立ち回るのはなく、当事者を支える仲間を増やしていくことの重要性に気づきました。そして、そのためには支援者の支援が必要と感じ、法律の知識を活かして現場のサポートを行うようになりました。

子どもの分野は親権の関係もある為、現場は様々なルールでがんじがらめになりやすいですが、中には法的な根拠がないもの、法律ではそこまで求められていないけれど自主基準で行われているもの等があります。それらを解きほぐして「この場合は親の同意なしでできる」とか「この方法だと親の同意が必要になるが、この方法であれば解決できるかも」と知恵を使う。

法律と福祉の相性の悪さもあって、法的にはリスクがあっても、当事者にはそれが一番必要という場合に、法的な話だけをするリスクを避けてそれはやらないほうがよいという話になりがち。でも、当事者のために何が必要かというのが根っこのはずで「こういうやり方もあるんじゃないの?」と実践を積み重ねていくと、支援の選択肢も広がっていくし、法改正をしなくても、現場の運用で対応できることはたくさんあると思います。国に強く働きかけるようなものだけではない、現場からのボトムアップのソーシャルアクションを増やしていきたいです。「当事者のためになんとかうまくやる方法はない?」と聞かれたと

きに裏技や寝技を考えつつ、根拠として説明できるロジックを用意しておく。チームで動くなかで、「やばいところは自分が線を引くので」と言えるのが、私の強みだと思います。司法と福祉の連携では、司法が強くなりがちですが、そうではなく司法と福祉が互いの専門性を尊重した形での連携、協働した実践が大事だと思います。

「最後に一々二年目のソーシャルワーカーに一言伝えたいですか?」

くじけないで欲しいと思います。が、そのためにも支援者のサポートが急務だと思っています。市川に若者支援の拠点スペースを作ったのですが、そこは、若者当事者だけでなく若い支援者の支えの場になるといいなと思っています。支援にモヤモヤを感じたときなどに、気軽に連絡くれれば嬉しいです。

「ちば子ども若者ネットワークの拠点のサイト」

<https://c-kowaka.net/>



社会福祉士のわ

わ

社会福祉法人クローバー会

第2クローバー学園

床井 祐介(とこい ゆうすけ)



私は障害者支援施設で勤務しております床井と申します。大学時代、同じゼミで鎬を削った佐藤さんから久々に連絡がきて、『社会福祉士のわ』のボタンが回ってきました。大学の友人とも少しずつ疎遠になりつつある中で、佐藤さんが連絡をくれたのは、嬉しい反面、原稿を書く重圧も感じています。大学つながりでボタンが回ってきたというだけで、大学に通っていた頃を振り返ると、私は大学に通

ってはいいたものの、あまり勉強もせず、友達とワイワイやりながら人生の夏休みを謳歌していました。大学三年生になり、少しずつ就職を考えなければならぬ時期になった頃、障害者支援施設(当時は知的障害者入所更生施設)へ実習に行き、初めて施設入所している知的障害者の方々と接しました。一緒に農作業を行ったり、行事に参加したり、職員の方々にもフレンドリーに接してもらい、実習はとても楽しく行うことができました。毎日、実習ノートも頑張って書いていましたが、当時の実習ノートを見返すとよくこんなノートを出していたなと思えるような内容でした。

ある日、いつも通り実習施設に行き、利用者に挨拶をしていましたが、一人ふさぎ込んでいる利用

者がおり、声をかけてみたところ、「話し掛けるな」と言わんばかりに手を振りほどかれてしまいました。

これまでその利用者とは、割とコミュニケーションも取れていた(勝手にそう思い込んでいた)ので、もう少し関わってみようと思

い、声を掛けてみたところ、顔面に井上尚弥ばりのパンチを食らってしまいました。まさか殴られるとは予想もしていなかっただけに、自分も何が起きたかわかりませんでした。人から殴られることなんてほとんど経験ないことでしたので、自分も驚いたのと、周囲にいた職員の慌てふためいた顔は今でも覚えています。殴られてカッとなるよりも、なんで殴られたんだという不可解な思いのほうが強く、その理由を知りたい思いがきっかけで知的障害者の入所施設への就職を決めました。

今思えば、そんな理由で就職決める? って感じではありませんが、自分の人生において、そのショックキングな出来事がなぜか自分の好奇心を刺激し、自分の将来の進路

を決めるきっかけになったことは間違いありません。

そんなこんなで現在の施設に勤め始め、今年の五月で二十年。あつという間だったと思います。今は、実習指導者の立場になり、実習生と関わっています。実習は、自分の将来を決めるくらいインパクトのある期間であって欲しいと思いつつながら実習指導を行っていています。さすがに殴られるような場面は避けてもらいますが・・・。「いい実習ができました」と思ってもらうこと、ゆくゆくは福祉の仕事に就きたいと思ってもらえるように、この仕事のおもしろさ、やりがい、苦悩、達成感を感じられるような実習にすること、また、実習指導者としても新しい刺激をもらいながら、自分も一緒に成長していけるように、今年もがんばっていきましょう。



新養成課程における社会福祉士実習での

実習指導者へのお願い

千葉県養成校連盟代表・淑徳大学

渋谷 哲 (しづや さとし)



方には次のようなことをお願いしたいと思っています。

実習プログラムへの追加

実習施設・機関で学ぶ内容、つまり従来の実習プログラムに追加して頂きたいのは次の四点です。

- ① 従来の支援計画の作成まででなく、支援の実施と事後評価を行う
- ② 多職種・多機関・地域住民等との、連携のあり方と具体的な支援内容を実践的に理解させる
- ③ 実習施設・機関が展開している、地域社会への具体的なはたらきかけを理解させる
- ④ ソーシャルワーク実践に求められる技術を、実践的に理解させる

実習六〇時間増に対する実習プログラムの作成

これまで多くの実習施設・機関

では、一八〇時間実習のプログラムを作成し展開されたと思います。が、新養成課程では実習が二四〇時間となりました。しかも、機能が異なる二ヶ所以上の実習施設・機関で行い、さらに一ヶ所は一八〇時間以上と規定されました。実習の時期や時間数は各養成校によって異なりますが、千葉県内の養成校では、「一回目が六〇時間十二回目が一八〇時間」が二校、「一八〇時間十六〇時間」が三校の予定です。全養成校で統一できないのは、社会福祉士以外の資格との関係が理由であり、申し訳ありません。

ここで留意したいことは、実習生は二ヶ所以上・二四〇時間の実習すべてを通して、新教育課程に示されている事項を網羅的に体験し、すべての目標の達成を実現することが今回の実習の目的になっていることです。

よって、このうち六〇時間の実習では、従来の三段階（職場・職種・ソーシャルワーク）実習モデルがうまく機能しないことが懸念

されるので見直しがされています。また、実習生が一回目か二回目かによって、実習プログラムの内容や到達目標が異なることも理由のひとつです。

新たに提示されているのは、基本実習プログラム（実習施設・機関で提供できる実習内容を網羅したもの）と個別実習プログラム（六〇時間実習と一八〇時間実習の際の具体的な実習内容）の作成です。よって、基本実習プログラムの他に、六〇時間実習と一八〇時間実習の二つの個別実習プログラム、つまり三つの実習プログラムを作成して頂くこととなります。

紙面の関係で詳細は説明できませんが、実習指導者の方は「新版社会福祉士実習指導者テキスト」（日本社会福祉士会編・中央法規出版・二〇二二年四月）を購入して頂き、新たなソーシャルワーク実習についてご理解頂ければ幸いです。「社会福祉士を育てるのは社会福祉士」を実現するために宜しくお願いたします。

「孤独・孤立相談ダイヤル#9999 試行」に参加して

千葉県社会福祉士会

副会長、研修員会副委員長

白井正和（しらいまさかず）



孤独孤立ダイヤルは二〇二二年二月に国の内閣官房に「孤独・孤立対策担当室」が設置され政府の重点計画の「孤独・孤立対策」として試行的に開始された。

官民の関係団体が連携し、あらゆる困りごとに対して、「分野をこえて相談を受けける」とともに、支援制度や地域の支援拠点、機関等につながるまでの伴走を想定して、それぞれの団体が枠をこえて学び合い、実際の支援と一緒に携わっていく経験を積み重ねることで、支援の裾野を拡げていくこと、ひ

いては、日本社会全体の相談対応能力や、地域の支援組織の底上げにもつながると期待されているとしている。

当会の取り組みとしては、日本社会福祉士会経由での依頼により、理事会で審議され先ずは理事で対応することが決まり第二期（八月）より参加した。その後第三期（十二月一日）より会員への公募を実施し、年末年始（十二月二八日・二九日）も含め対応した。

相談体制としては一回線あたり相談員二名、コーディネーター一名の三名を一チームとして一枠三時間を基本として対応した。相談対応で緊急な状況や対応に苦慮した場合、直ぐにオンライン上で「つなぎ支援コーディネーター」と協議対応・調整を行った。

相談者に対して一回三十分の対応を目安とし、個人情報、匿名性、傾聴、相談の方向性、対応の見定

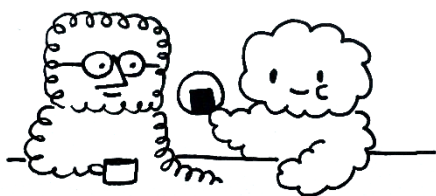
め、ストレッチングス、エンパワーメント、つなぎ支援、つなぎまでの伴奏支援等を意識して行われた。また、同時並行で全国様々な支援団体や相談機関、専門家が、大きなチームとしての相談対応が行われていた。

相談内容の概要として「台風（緊急時）の生活確保について」「配偶者が亡くなった後の生活について」「現状の生活環境における悩み、今後どう生きていけばよいか」等に対応した。また、日常業務で専門的に相談対応している者でもいづ、どのような相談が入るか相談者と顔を合わせない状況で緊張感を待って待機するとともに架電後の対応について不安や焦り等対応に悩むこともあった。しかしながら同時に三名で相談内容を傾聴していることから各人の専門性、経験を生かした相談対応者へのその場でのアドバイスを、チームとしての対応でできた。

相談への参加の意義として、チームで相談内容をリアルタイムで共有できていることから援助スキ

ルの勉強になる。終了後に相談内容の振り返りも行われソーシャルワークについて、日常の実践を振り返る良い機会となった。社会福祉士（ソーシャルワーカー）として基本的技術を必要とされ、この相談対応に参加する意義は大きい。また、電話待ちの時間でも三名でコミュニケーションを図る貴重な時間となった。

現在は試行的な段階であり、今後、どのような体制になっていくのか不明であるが、当会として今後の対応継続について検討していく必要性を感じる。また、当会として参加する際は会員の皆様自身の経験を積む場としてご協力いただければ有難いと感ずる。



談話室に参加して

千葉県スクールソーシャルワーカー
山田 茜(やまだ あかね)



令和四年十一月六日(日)千葉
県社会福祉士会主催の談話室へ参
加してきました。

オンラインでの研修にも慣れ、
「人とリアルに会わない生活」に
もようやく慣れてきたコロナ禍三
年目の秋。新しい生活様式には慣
れてきたものの、Zoom研修に参加
してもリアルな人脈が広がらない。
なんだか物足りない。そんな中で
の「談話室開催」の知らせでした。
リアルでソーシャルワーカーに会
える。もしかしたら自分の仕事の
役に立つかもしれない。そんな期
待を込めて参加申し込みをしまし
た。

談話室当日、会場に到着すると、
先輩ソーシャルワーカーたちがに
こやかに迎えてくれました。直前
まで、何を話したらいいんだろ
う?と緊張もありましたが、先輩
たちの温かな対応に「ここに居て
もいいんだ」と緊張が解けていき
ました。

談話室の始めに、榎林会長から
の話がありました。十二年前の東
日本大震災のとき、浦安市で液状
化現象が起こり、浦安だけでなく
色んな場所で大くさんの人が「困
っている」なか、助けてほしいと
言っているのか分からなかった。
だけど、勇気を出して助けてと言
ったら、たくさんの方が助けてく
れた。自分から「助けて!」と声
をあげるとは難しいけれど、ど
うか勇気を出して「助けて」を言
ってほしい。そうしたら仲間がき
くと助けてくれる。そういう仲間を
ここで作ってほしい。そんな風に
会長はお話してくださいました。
思い起こせば、私自身も、ソー
シャルワーカーとして仕事をして
いく中で、いくつか困難に直面し

ていました。取り留めのない小さ
な悩みから、組織や制度の中に解
決する仕組みがないような、大き
な困難もありました。談話室で参
加者の方々と、自分の仕事の良い
ところ、大変なところ、やりがい、
課題などいろいろな話をしてく中
で、気づいたことがありました。

それは、「みんな自分と同じような
悩みや困難を抱えている」という
ことです。仕事の悩みを一人で抱
えていた時は「自分のやり方が悪
いからだ」とか「知識やスキルが
足りないからだ」など、少なから
ず自分を責めるような気持ちでい
ましたが、もしかしたらそうでは
ないのかもしれないと感じられた
と同時に、心がすっと軽くなりま
した。そして、いろいろな困難の
中でも前を向き、チャレンジし続
ける姿勢の大切さを再確認できま
した。

談話室は二時間程度でお開きと
なりましたが、高齢・障害・児童
など様々な領域の方が参加してお
り、新たなネットワーク作りの大
きな助けになりました。総勢二九

人の参加でしたが、人と人、人と
資源を繋いでいく私たち社会福祉
士にとって、同じ志をもつ同志(仲
間)との繋がりは、最強の武器に
なるのではないかと感じました。
最後になりますが、お忙しい中、
主催してくださった千葉県社会福
祉士会の皆さま、本当にありがと
うございました。



事務局便り

長い冬が終わり、待ちに待った春が来ました。みなさまいかがお過ごしでしょうか。

年度末や年度初めの準備でお忙しい日々をお過ごしのことと思います。季節の変わり目は体調を崩しやすくなります。くれぐれもご自愛ください。事務局も年度末と転居準備に追われ忙しい3月となりました。

4月1日からは新しい建物で心機一転、しっかりと事務局業務を行って参ります。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

事務局移転のご案内

令和5年4月1日より事務局が移転いたします。

新事務局：〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港4番5号 千葉県社会福祉センター5階
電話番号：043-238-2866 FAX 番号：043-238-2867 （電話・FAX 番号変更なし）

会員の皆様へお願い

- ・【重要】2023年度年会費引落のお知らせ

年会費 15,000 円と引落手数料 121 円の合計 15,121 円を 2023年 4月 12日（水）にご指定の口座より引落させていただきますので残高不足等がないようにご確認をお願いいたします。

- ・お名前・ご住所・電話 FAX 番号・お勤め先等が変更となった場合、変更届の提出が必要です。ご不明の点は事務局までお気軽にご連絡ください。

ようこそ！千葉県社会福祉士会へ

氏名	居住地	勤務先	氏名	居住地	勤務先
増子 麗	—	矢切地域包括支援センター	青木 一磨	—	福)大成会 暮らしサポート成田
田中 美保	—	—	瀧上 真悟	市川市	—
渡邊 美誉	流山市	流山市社会福祉協議会	福田 ゆず子	大網白里市	チームまいまい
渡邊 雄樹	船橋市	福)松里福祉会	仙田 彬人	松戸市	松戸市役所
藤井 宏成	船橋市	—			

※正会員登録書「点と線掲載の可否」の項目で、可に○を頂いている方のみ掲載しております。（順不同・敬称省略）

令和5年1月10日現在の会員数

正会員 1,588名、準会員 3名、賛助会員 2名 合計1,593名